

篠崎茂穂先生について

一番ヶ瀬 康子

篠崎茂穂先生は、明治三二年、九州の福岡県で出生された。先生のあつさりした、そして一徹な御性格は、まさに九州男子のそれである。

大正六年、世界第一次大戦も終りに近づいた頃、先生は志をいだいて郷閥を出られ、早稲田大学高等予科に入学された。その頃の早稲田大学は、周知のとおり、尾崎士郎が「人生劇場」に画いた頃の早稲田大学である。壯氣と野党精神にみちあふれた一方、当時の社会変動を背景として、さまざまな学内の変革が、せまられていくときであった。その激流をみつめながら、先生の心は、永遠の変らざるものを求められてか、キリスト教徒として受洗された。そして大正八年四月、早稲田大学商学部に進学されたが、中途で自らの志を広く海外に求められ、大正九年、ハワイのプナホ・スクールに入学された。それは当時難関といわれた海外留学生のための奨学金のひとつ、フレンド平和奨学金（大隈重信会長）によってであった。その後帰国され、大正一〇年五月、再び早稲田大学商学部に編入された。第一次大戦後の激動す

る日本の社会思想のもとで、先生は厳しい問題意識のもとに、「マルクス主義と宗教」について卒業論文をまとめられ、大正一三年三月に卒業された。

その後一年間徴兵生活をおくられ、さらに早稲田奉仕園に勤務、その間、キリスト教への信仰をますます深められ、一方さらに得意な英語の研讀をつまたのである。そして昭和二年二月、バプテスト・ミッショングからの奨学金で再び渡米、昭和五年二月まで、米国のクローリー神学校ならびにベンシルベニア大学大学院において、神学さらにそれを基調とした社会改良についての研究をなさった。当時の先生の恩師は、戦後わが国においても牛島義友先生などによつて紹介された、児童の社会心理の権威者であるジエームズ・バサード博士であつた。その間のこととは、先生の論稿のひとつである「恩師ジエームズ・バサード博士の紹介」（日本女子大学「社会福祉」四号、五号）につぎのように記してある。「ベンシルベニア大学の大学院でバサード博士より最初に社会福祉学を学んだのは一九二八年で、其の後三十年

遂に社会的負債者階級 (Social Debtor-Classes) と児童福祉学等を学ぶ機を得た。之が私が福祉学に興味を持った最初であった。

なお、ベンシルヴァニア大学院での修士論文は「アメリカの救貧法」であった。

帰国後、再び早稲田大学奉仕園に勤務されたが、昭和一二年四月、要請により日本女子大学助教授に就任された。当初は、英文学科所属であつたが、後に教授として家政学部三類つまり現在の社会福祉学科にうつられた。その後、実に三〇年間、一方で早稲田奉仕園主事、さらに教会牧師をつとめながら、女子大では、「社会学」「社会問題」「原書講読」などを講じられたのである。また、昭和三六年から四年間、日本女子大学図書館主事をつとめられ、現在の図書館建設の推進役となられ、さらに昭和四〇年から定年までの一年間は、社会福祉学科主任として貢献されたのである。

その間、先生の書かれた主要な論文はいくつかあるが、代表的なものは、つぎの四つであると、先生御自身でのべておられる。

「旧約聖書の社会問題」(日本女子大学「社会福祉」二二号)

「米国の離婚問題」(日本女子大学「紀要」九号)

「家庭生活における儀礼」(日本女子大学「社会福祉」六号)

「Dating & Courtship に就いて」(日本女子大学「紀要」十一号)

「欧美図書館の調査」(日本女子大学「紀要」十二号)

「」など、三番目のデータにかんする論文はすぐれたもので、いままで日本の社会学界では研究されたことがなかつた問題をとりあげ、アメリカにおけるその面の研究成果をふまえて紹介しながら、独自の見

解を示されたものであった。そのユニークな内容については、「人間の科学」(誠信書房、一号)でとりあげられ、紹介されたことがあった。

しかし、先生の御功績は、学者、研究者のそれとしてよりも、はるかに教育者としてのそれの方が大きかつたと、私はおもう。一般教育

課程において、先生の社会学の点数は、他の先生方に比して、きわめて厳しく、落第するものがもつとも多くて有名であった。だが、それに対して先生は、「この大学は、創立者が、女子に、眞実の學問を与え、知性を高めるために創られたものだ。だから、いい加減な学習には点を与えない」とされ、終始一貫、その態度をかえられなかつたのである。と同時に、先生は、自らに対しても厳しく処せられ、よほどのことがない限り、一日たりとも休まれず、また一分たりとも遅刻されず、正しく出席簿をとり、實に正確また丹念な講義をつづけられたのである。その先生の姿を、或る学生は、「篠崎先生こそ、もつとも教授らしい教授だと思います」と語つことがある。先生の人気は決して派手ではなく、また卒業論文につく者数なども多くはなかつたが、毎年必ず、何人かの学生は、先生の真髓を理解し、尊敬し、卒業後も敬愛してやまないというものが、後をたたなかつた。

私は、かつて家政学部三類において、先生から教えをうけ、またその後、助手として研究室にのこり、十数年間日本女子大学に職を奉じているが、昨年、先生が定年でおやめになるまで、もつとも親しく、先生と交らせていただいた者の一人である。その間、先生から、つねに学問に対する御忠告と、また苦境におちいったとき、真先に温いお励ましとをいただき、今日に至つた。そのたびに私は、大学に籍をお

くものにとつて必要なことは、単なる印刷物としての業績以上に「人生」そのものが業績であることを痛感してきた。

また、先生の「人生」を語るとき、忘れてはならないことがひとつある。それは、先生が、誠に立派な夫であり父親でいらっしゃったということである。先生御夫妻、また御家庭での先生のお姿にせつするとき、先生が、社会学の対象として「結婚」とか「デート」とかを選ばれたその奥の問題意識が、はつきり解るような気がしたことが、しばしばであった。

定年後、先生は、御自分でつねにベタ・ハーフと紹介されている奥さまとお二人で、静かな生活を送つておられる。三人のお子さまはすでに立派に成人され、お孫さんは四人いらっしゃるが、それぞれ別居されている。さいきん、お目にかかるときは、何百冊かの蔵書のかで、これから的生活への夢と抱負を、ますます元気に語つておられた。そのなかから、私はあらためて、先生の強い信仰と、社会学への愛着、社会福祉への根強い実践意欲を感じとつた。そして先生が、定年後の現在、大学から「籍」をぬかれていても、先生の「人生」への姿勢そのものは、いつまでも変わらない私どもの師であることを痛感したのである。